

御土居 –初めて造られた城塞–

(財)京都市埋蔵文化財研究所 小檜山一良

1. はじめに

16世紀末の天正年間、豊臣秀吉により、戦国時代の争乱に終止符がうたれ、天下統一がなされました。秀吉は、京都を本拠地とすべく都市の大改造事業を始めます。

- 1：まず、平安宮の跡地に天守閣や堀を備えた城郭である聚楽第を造営し、これを中心に大名屋敷町を建設しました。
- 2：次いで、御所を修復し、周りに公家屋敷町を配置しました。
- 3：京中に散在していた寺院を集中し、寺町・寺ノ内を形成しました。
- 4：平安時代以来の碁盤の目の町割りに新道を通し、短冊形の地割りに変更しました。
- 5：仕上げとして、京を囲む御土居を築きました。

天正十九年（1591）に御土居は外敵の襲来に備える防塁と、川の氾濫から市街地を守る堤防としても築かれました。北は上賀茂から鷹峯、西は紙屋川から東寺の西辺、東は鴨川の西岸、南は東寺の南側の九条通まで。南北8.5km、東西3.4km、総延長は22.5kmにも及びます。その工事は1月に始まり、5月には完成していたようです。

御土居の構造は、外側に堀を掘り巡らせ、内側には土を盛り上げ台形状の土塁を築いたもので、土塁上には竹木を植えていたようです。堀は、西辺の紙屋川（天神川）や東辺の鴨川などの河川や、池、沼などを利用しました。御土居の内側を洛中、外側は洛外と呼ばれ、要所には出入り口として、いわゆる「京の七口」がつくられました。

2. 発掘調査でわかった御土居の土塁と堀

御土居の南側およそ三分の二の範囲は、平安京の範囲と重複しているため平安京を目的とした発掘調査に伴って御土居の遺構が発見されることがあります。しかし、発掘によって現れる土塁はその基底部分が僅かに残っているだけで、造営当初の姿からはほど遠い状態です。一方、ほとんどの堀は埋め戻され平坦になっているために、発掘によって掘り下げると、造営当初の形状とさらに埋没していった過程も知ることができます。

これまでの発掘調査で、御土居の遺構が発見されています。それらによると土塁の幅は、基底部分で約20m、高さは残存高で2m程ありました。堀の幅は12.5～20mと場所によって違いがみられ、深さも1.5～2.5mと一定ではありませんでした。堀の規模や形状は、その立地する地形や場所によって

施工が変えられていたとみられます。

調査1 2007年度・京都市上京区御車道今出川下る二丁目栄町の集合住宅建設 *御土居と寺町を区画する南北方向の溝を検出。幅は1.6m以上、深さは0.6mを確認。試掘調査。

調査2 1993年度・京都市下京区東塩小路向畑町の京都駅駅舎改築 *旧一番線プラットホーム西端断面で2mの盛土の下に深さ1m以上の泥土層を確認。濠跡の中心部とみられる。緊急確認調査

調査3 1991年度・京都市南区西九条鳥居口町の松下興産 *南北二つの調査区で南北方向の堀を検出。堀は深さ約2.5m、泥土と砂礫が厚く堆積。砂礫には、弥生土器や古墳時代の土器が含まれる。底には凹凸がある。木製品が大量に出土した。

調査4 1984年度・京都市南区九条春日町の松下興産 *西端で南北方向の堀を検出。堀は幅約20m、深さ約1.5m、底部に凹凸がある。木製品が大量に出土した。この調査により、堀の幅がわかった。

調査5 2004～2006年度・京都市下京区観喜寺町のJR山陰線複線 *東西約14m・深さ約1.8m以上の濠跡を検出した。砂礫の堆積層で、堀が最終的に埋まった様子が分かった。

調査6 2009年度・京都市下京区朱雀正会町の公共職業安定所新築 *東西約12m・南北約5mの範囲で室町時代の遺物を含む整地層を検出。土塁の基底部分と判断した。調査区の西側は一段低くなる地形となっている。

調査7 1982年度・京都市下京区朱雀堂ノ口町の中央市場 *東西方向の土塁と堀、南北方向の堀の肩部を検出。土塁と堀を一体的に調査した。土塁の盛土は内側から堀側に盛る。堀底には凹凸がある。

調査8 1997年度・京都市下京区中堂寺南町のJR丹波口駅付近再開発事業 *南北方向の堀の西肩を検出したが、堀は未調査。

調査9 2000年度・京都市下京区中堂寺南町のJR丹波口駅周辺再開発事業 *1区で堀を検出。堀は調査8で検出した堀の北延長にあたる。堀幅約14m、埋土は泥土であるが、調査3・4ほど遺物は出土せず。

調査10 1982年度・京都市中京区西ノ京原町のマンション建設 *北側に市五郎大明神を祀る御土居が現存する。平安時代の西堀川小路を検出したが、土塁の遺構は未検出。

調査11 2000年度・京都市中京区西ノ京原町の立会調査 *南側に市五郎大明神を祀る御土居が現存する。堀跡とみられる湿地の堆積を確認。

調査12 1997年度・京都市中京区西ノ京南円町のJR山陰線拡幅 *土塁の盛土が残存し、その東側で泥土層の堆積と下位で溝を検出した。溝は土塁内側の排水用と

みられる。泥土層は溝から溢れた水が溜まったもの。

調査13 1991年度・京都市中区西ノ京門町の店舗建設

*土塁の基底部を検出。幅約16m、土塁基底部には室町時代後期の畑の畝や溝が残る。西側の堀には犬走り状の段がある。基底部の東側にも平行する溝あり。

調査14 1987年度・京都市中京区西ノ京中保町の北野中学校内

*現存する御土居のすぐ東側で、堀の南肩を検出したが、内部は未調査。その南側にV字形の溝を検出した。

調査15 1988年度・京都市上京区今小路通御前通西入紙屋川町の宅地造成工事 *土塁の基底部とみられる整地層を検出。立会調査。

調査16 1995年度・京都市北区鷹峯旧土居町の佛教大学研究棟建設

*土塁の盛土は検出されなかった。

参考 山科本願寺の土塁の断面図 土塁の高さは約6 m。土塁の土は堀側から盛り上げを始め、内側に向かって土砂を投入していく様子が分かる。

3、御土居の濠からの多様な出土遺物

発掘によって御土居の堀からは、様々な種類の遺物が出土しています。その内容は、土器・陶磁器類、瓦類、金属製品、石加工品など、当時の人々が使用した生活に密着した物品です。他には、多量に出土した木製品が注目されます。堀の中には、泥土と砂礫の厚い堆積層があり、木製品はこの湿った泥土の層でパックされていたので、埋没した当時の状態を良く保っていたのです。

出土した木製品には、工具・紡績具・服飾具・容器・食事具・調理具・文房具・計量具・楽器・遊戯具・部材など様々な種類のものがあります。なかには荷札などの文字を墨書するものも含まれており、年号を記すものも少数ですが出土しています。それらによると堀は、掘られてから100年ほどで完全に埋没したらしく、御土居の堀は、長い期間にわたり都市住民の生活廃材の捨て場となっていました。これらから当時の人々の暮らしを知ることができます。

4、史跡として現存する御土居

江戸時代になると、外敵の脅威は無くなり、市街地が洛外に広がるにつれて土塁は次々と取り壊されました。近代になってからその加速度は増し、既に多くが消失しました。御土居の遺構は、北西部を中心に僅かに残り、現在は9ヵ所が国の史跡に指定されています。

調査報告・文献

調査1：「御土居跡・寺町旧域」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成22年度』2009年

調査2：緊急確認調査のため、未報告。

調査3：「平安京左京九条二坊」『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』1995年

調査4：「平安京左京九条二坊」『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』1987年

調査5：『平安京跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-18 2007年

調査6：『平安京左京七条一坊四町跡・御土居跡』 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-1 2009年

調査7：「右京七条一坊」『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』1984年

調査8：「平安京右京六条一坊」『平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要』1999年

調査9：『平安京右京六条一坊・左京六条一坊』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-6 2002年

調査10：「右京三条二坊」『昭和57年度京都埋蔵文化財発掘概要』1984年

調査11：「一覧表」『京都市遺跡立会調査概報 平成13年度』2002年

調査12：「平安宮左馬寮・朝堂院・平安京右京一・二条二～四坊」『平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要』1999年

調査13：「平安京右京一条二坊」『平成11年度京都市埋蔵文化財調査概要』2002年

調査14：「平安京右京一条二坊」『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』1991年

調査15：「一覧表」『昭和63年度京都市内遺跡試掘立会調査概報』1988年

調査16：『文学部論集』第83号 佛教大学 1993年

文献1：丸川義広「御土居跡の発掘調査とその成果」『日本史研究』420号 1997年

文献2：丸川義広「御土居の発掘調査」『豊臣秀吉と京都-聚楽第・御土居と伏見城』日本史研究会編 文理閣 2001年

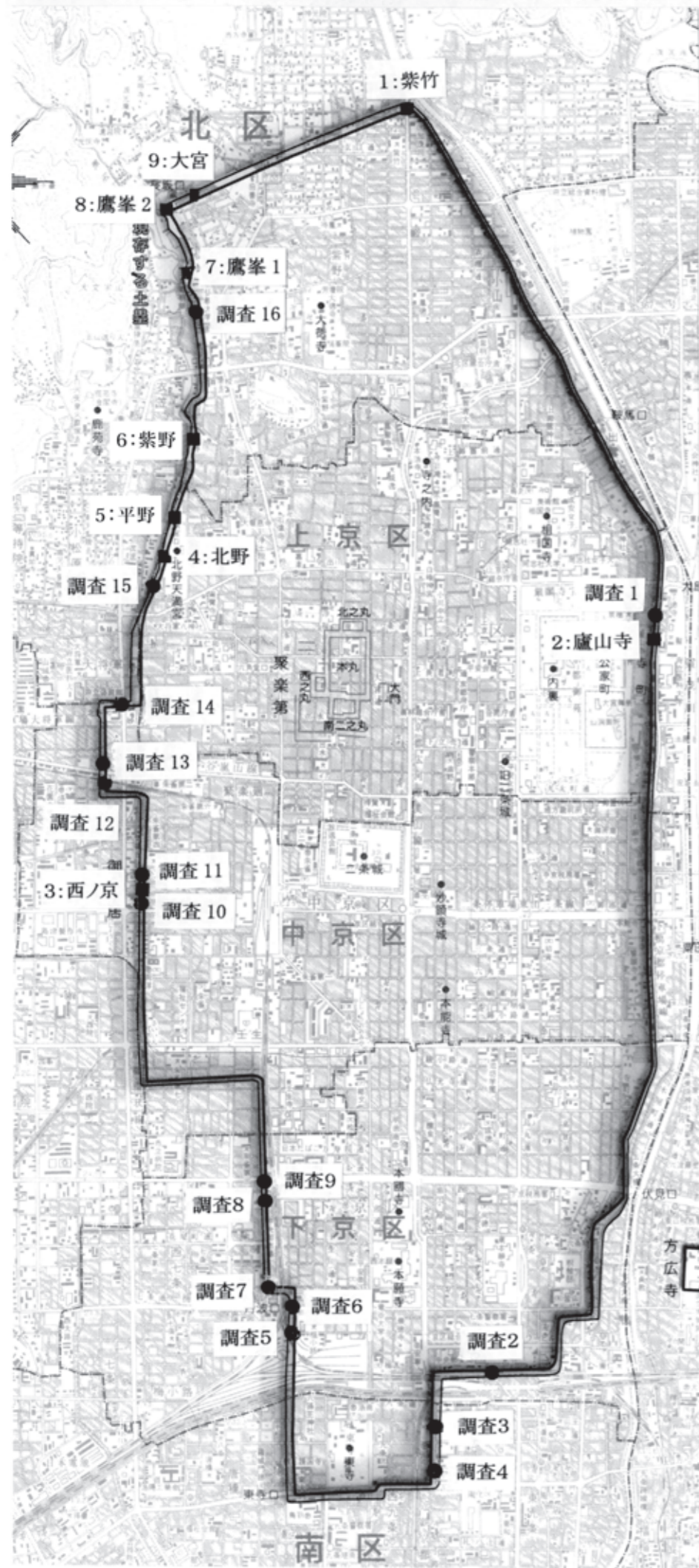


図1 御土居全体図

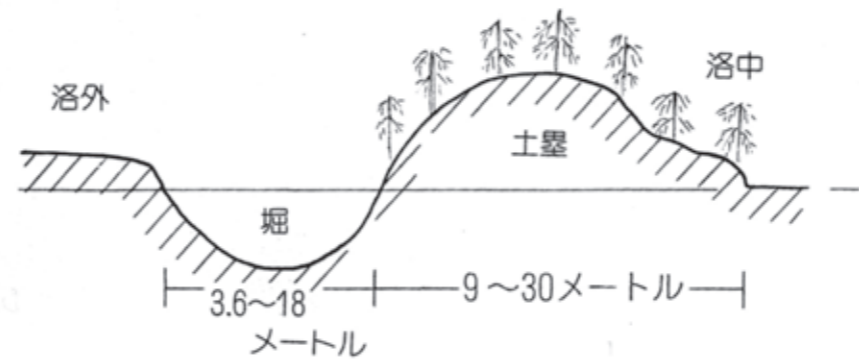


図2 御土居の平均断面図(京都市文化財だより'94・第21号)

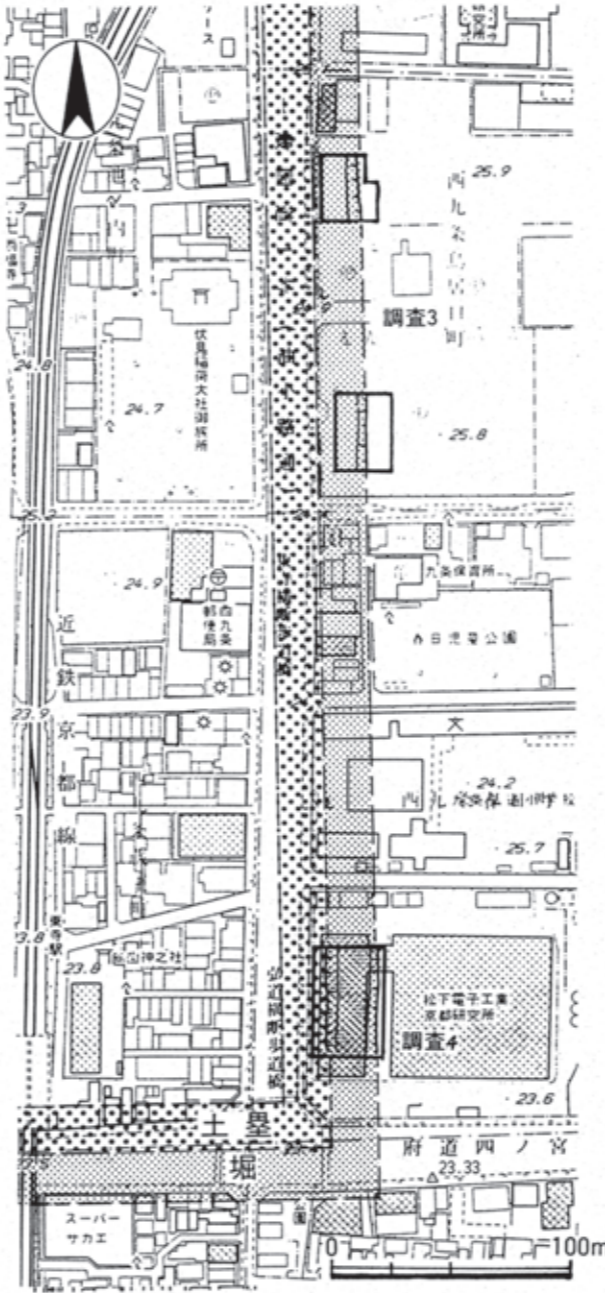


図3 調査3・4の配置と御土居の位置(文献2)

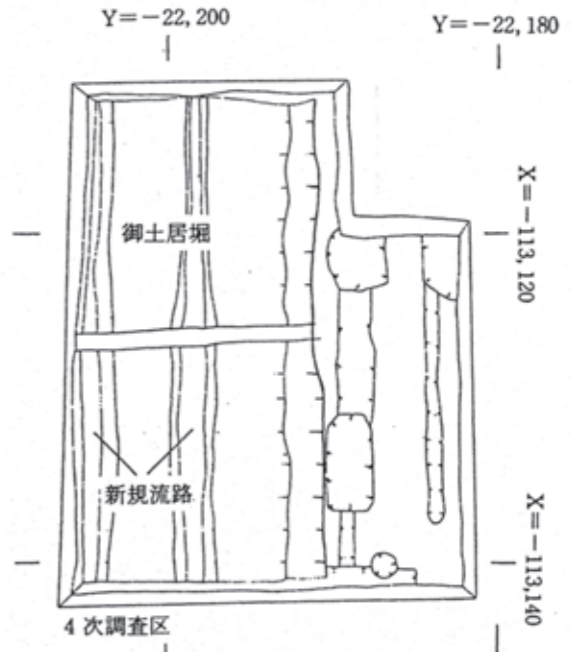
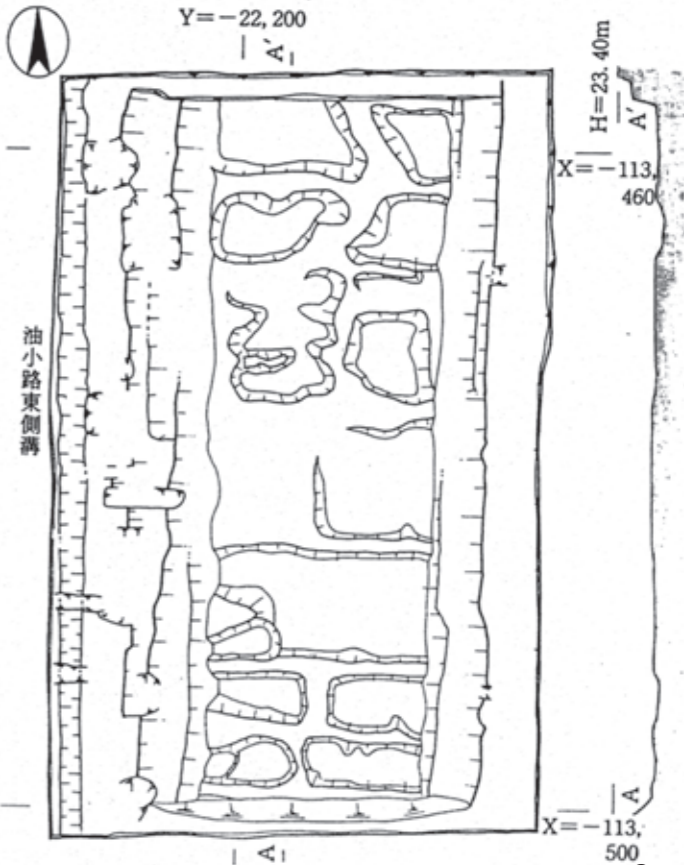
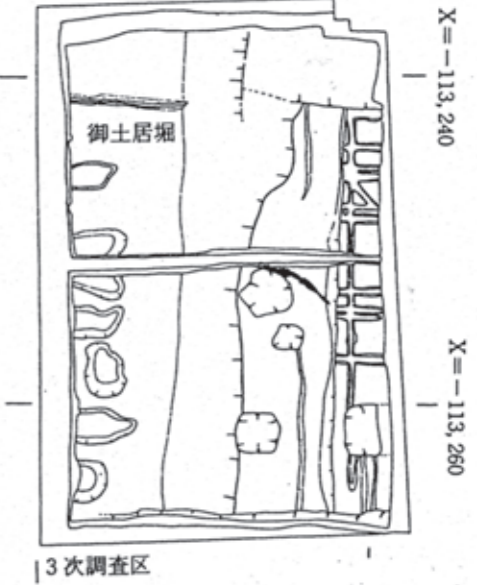


図4 調査3・4の堀の平面図



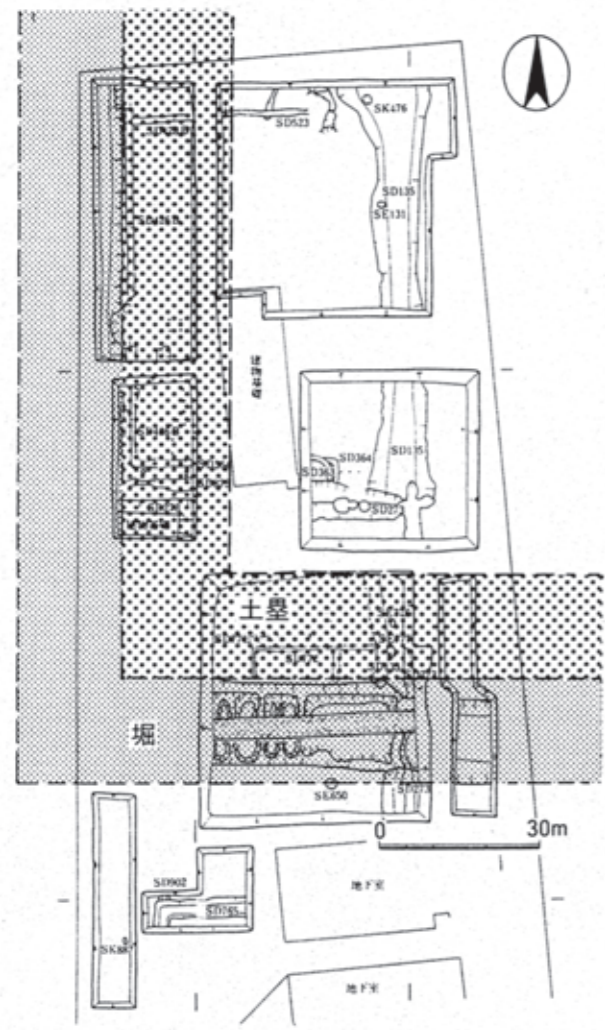


図5 調査7の配置と御土居の位置(文献2)

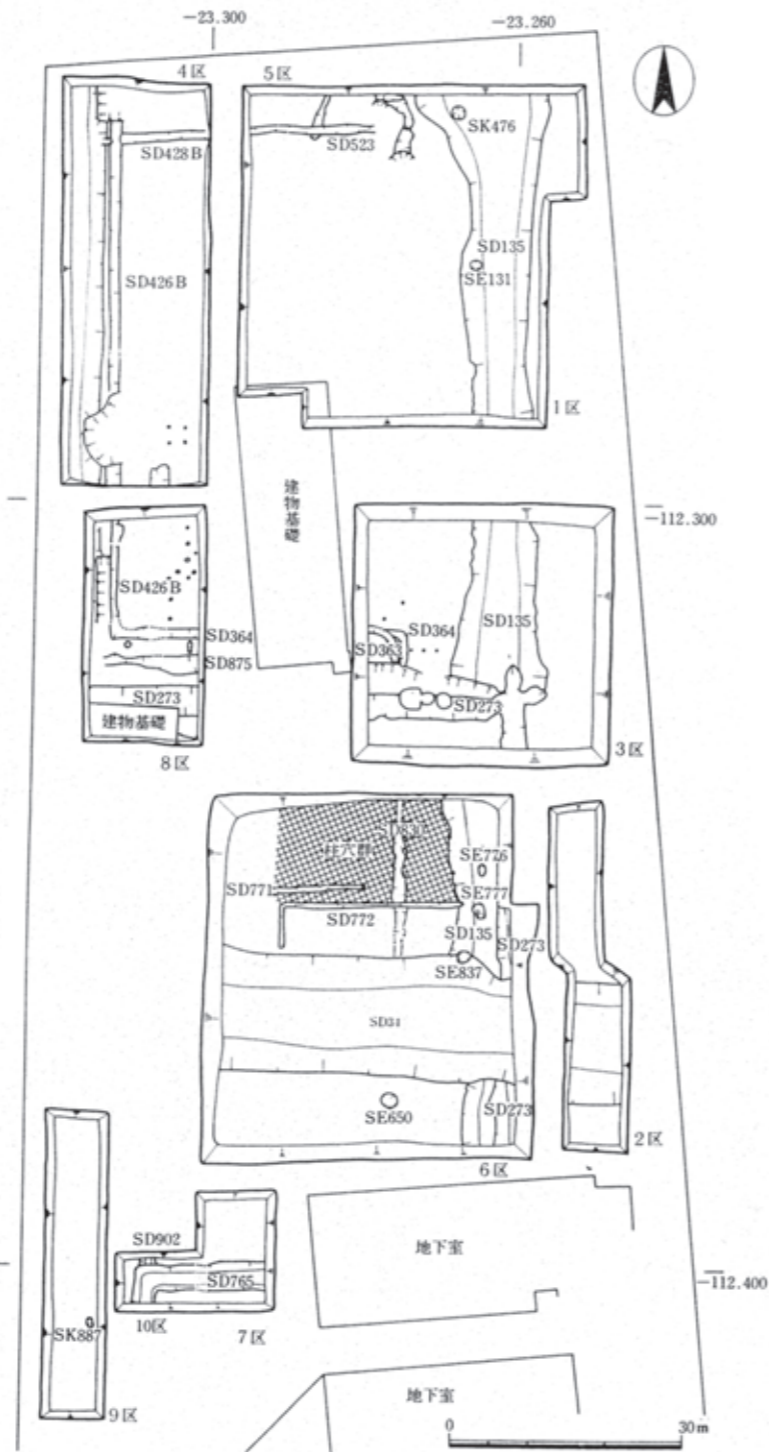


図6 調査7の堀と土塁の平面図

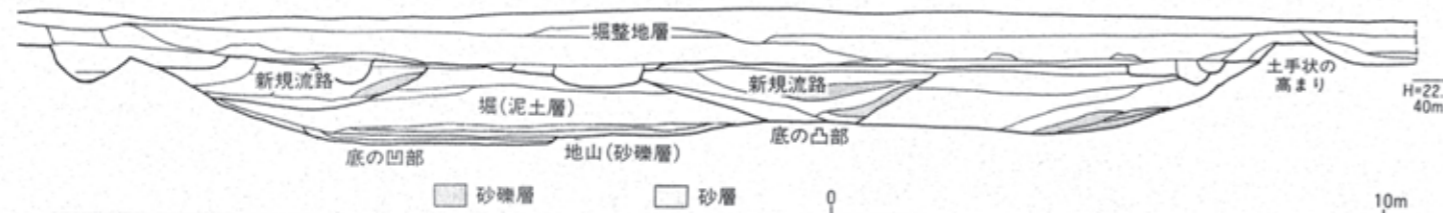


図7 調査4の堀の断面図(文献2)

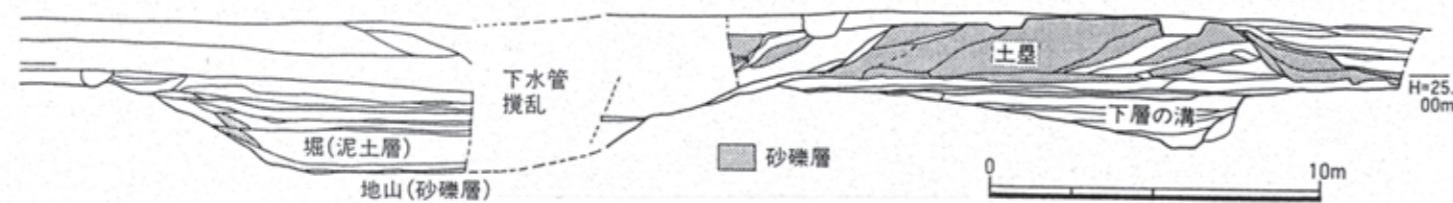


図8 調査7の堀の断面図(文献2)

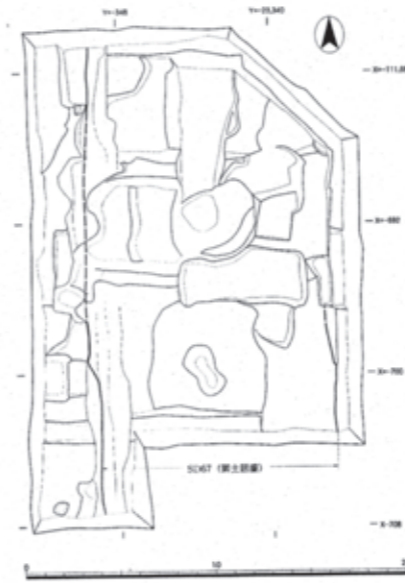


図9 調査8・9の平面図

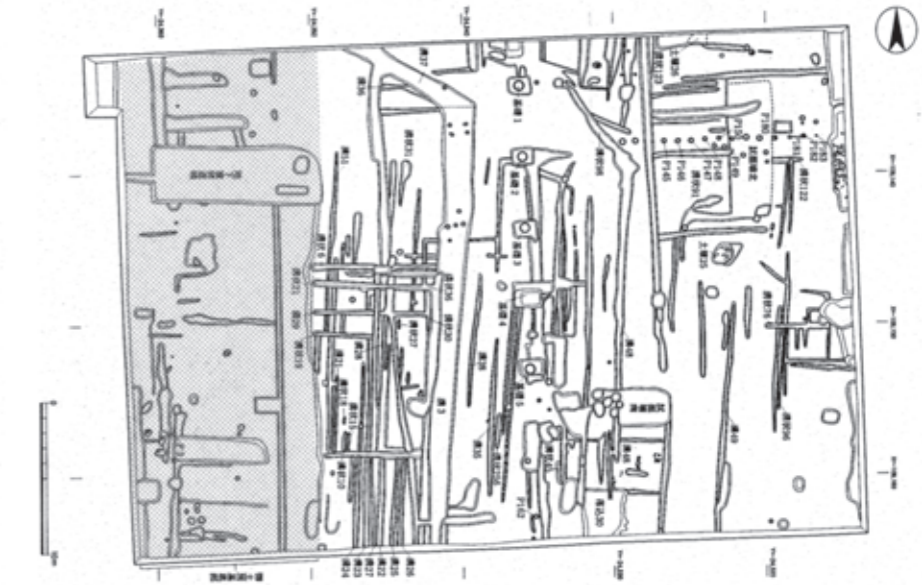


図11 調査13の平面図

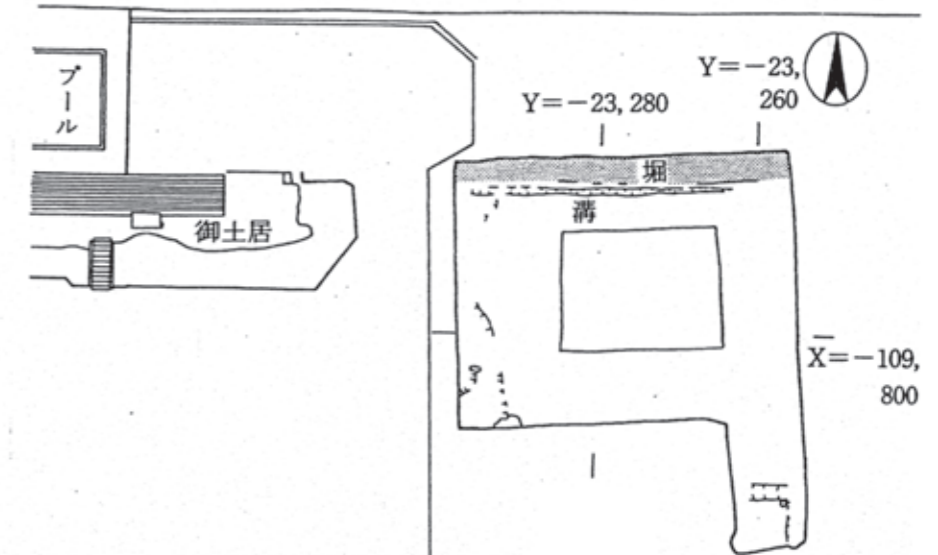
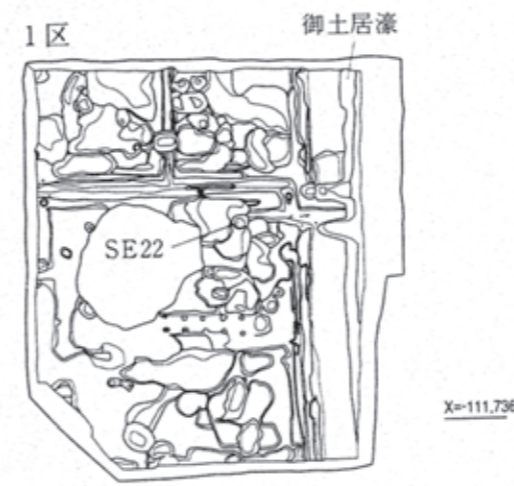


図12 調査14の平面図(文献1)

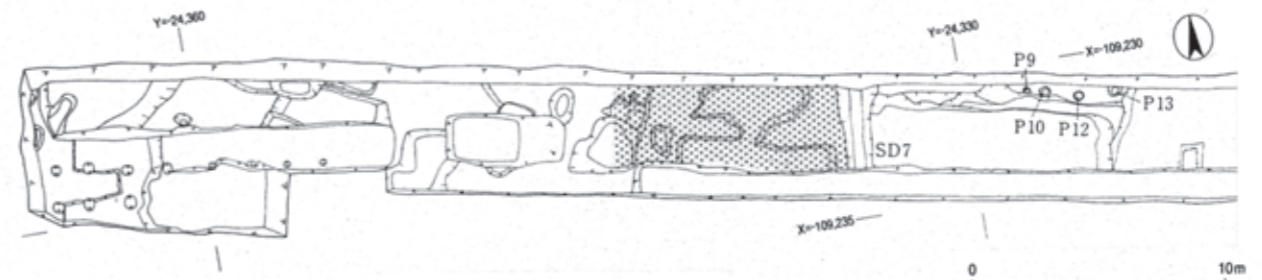


図10 調査12の平面図

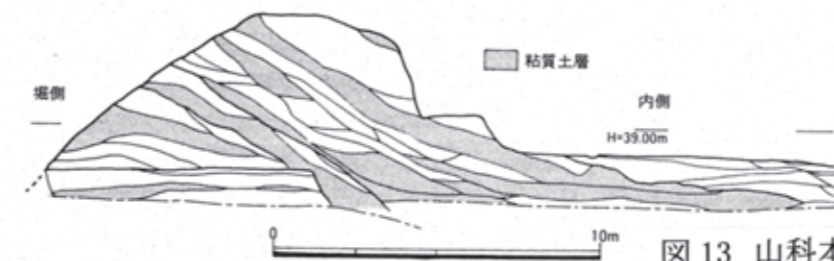
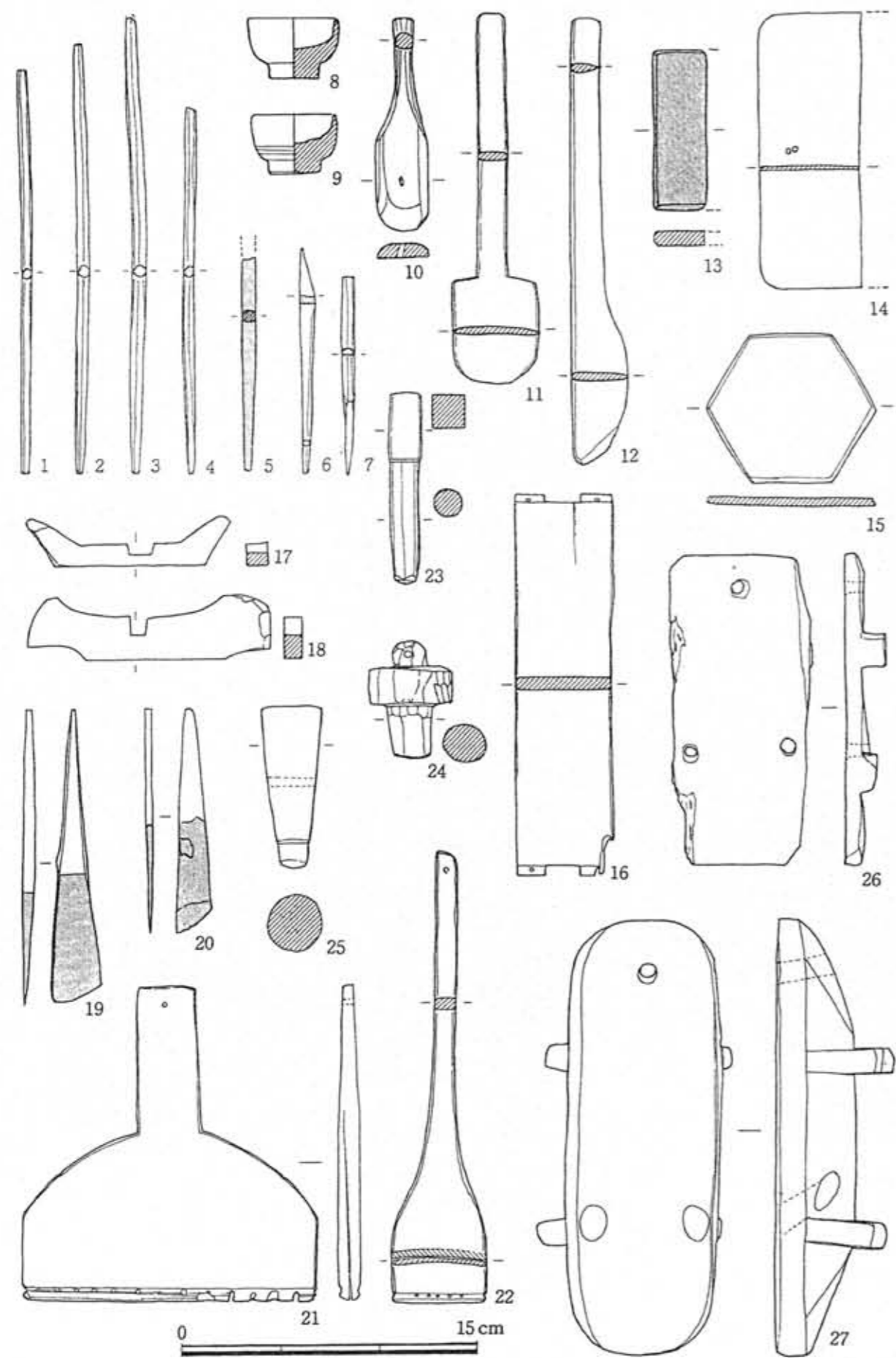
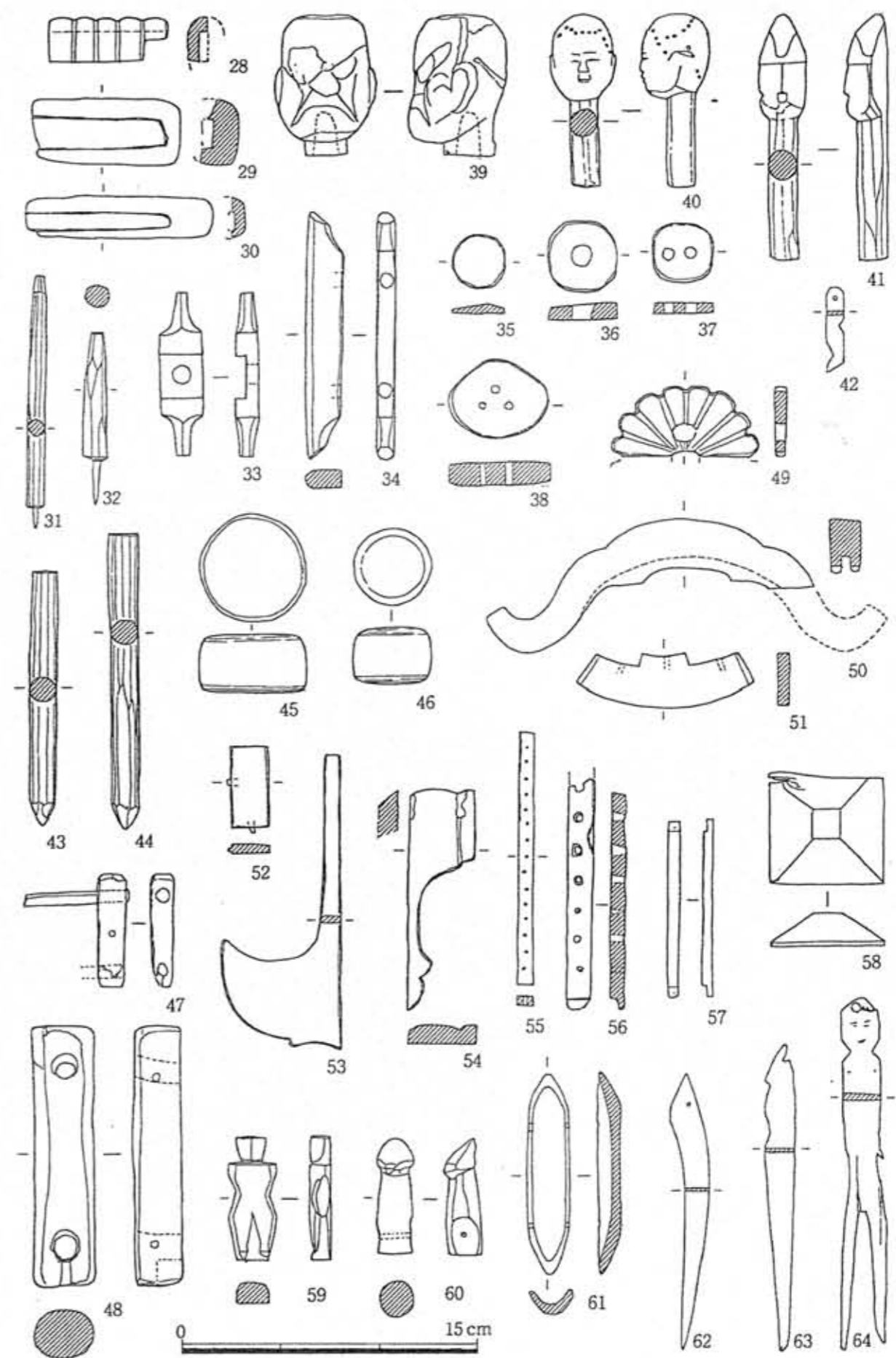


図13 山科本願寺の土塁の断面図(文献2)



調査4出土の木製品1(1:4)



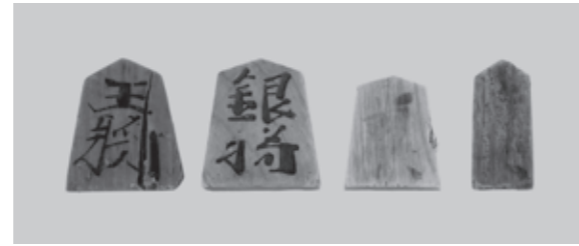
調査4出土の木製品2(1:4)



人形の頭 植毛を施した写実的なものや、鼻・口だけのものがある。



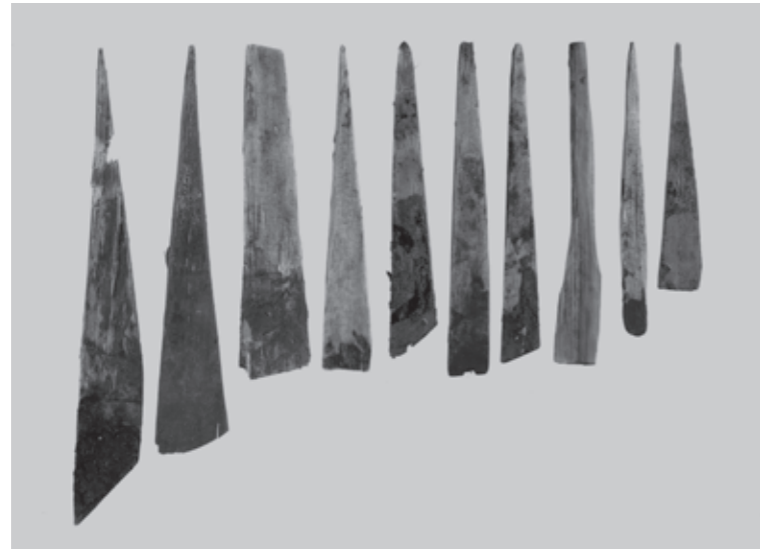
ミニチュア木製品 口径1cmほどで、椀や臼がみられる。



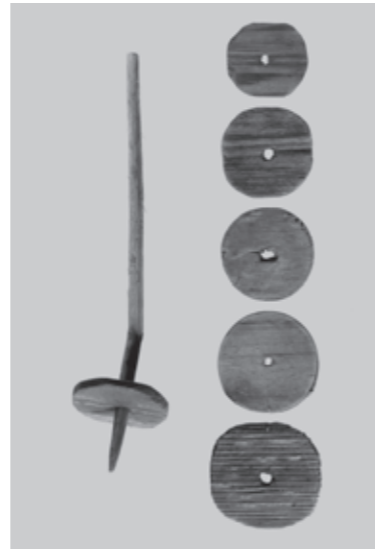
将棋駒 駒尻を厚く作り、将位は漆書きする。



錐 木の板などに、穴を穿つ用具。



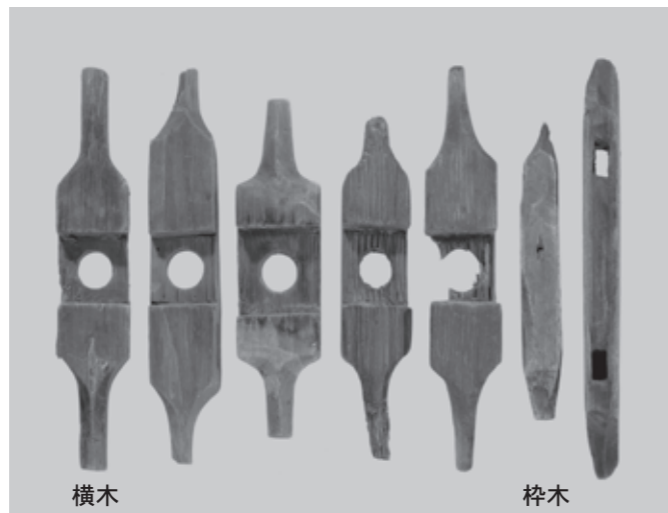
漆ヘラ 漆器の製作に用いる木製のヘラで、塗った漆が付着している。



紡錘車 糸を紡ぐ用具で、円形のはずみ車と軸棒から成る。



刷毛 糊などを塗る用具で、毛は欠失し木製の柄だけが遺る。



糸巻き 横木の中央の相欠きで十字に組み合わせ、端を梓木に開けた上・下の柄穴に差し込んで固定する。



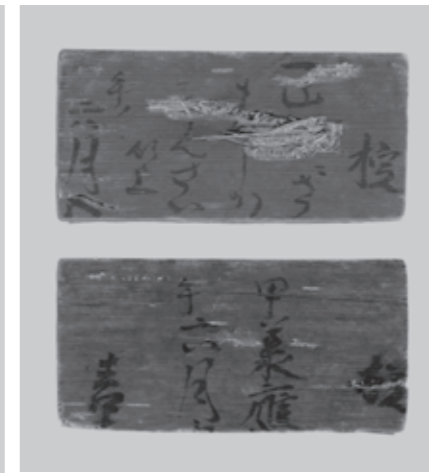
糸巻き 墨書は、持ち主の名前か。



木簡（付け札） 「口寶三年」延宝3年（1675）かもしれない。「池田屋」・「まつや」は商店の店名、「へ（やま）久」は記号と文字を組み合わせた屋号。



木簡（付け札） 書きものをするための紙、33束の荷に付けられたもの。1束は10帖200枚にあたる。



曲物蓋 丁子の絵柄2個と○に「山」字を墨書。

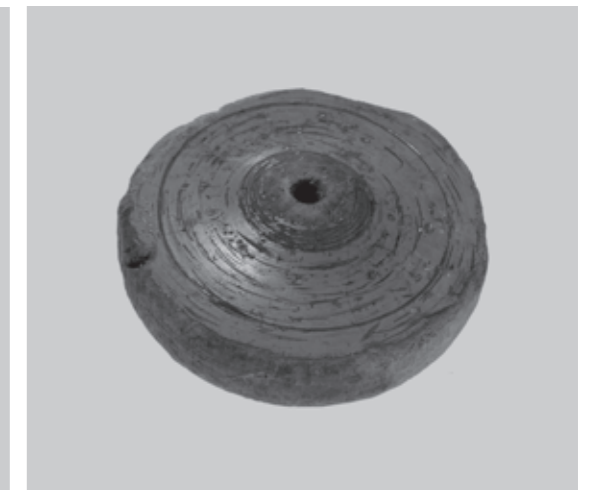
一〇二さ〇
〇〇か〇
〇〇さい〇
以上
午後
六月五
午
去四
甲
承應
天正十三
年
三月
廿日
天正十三年（1585）の銘が墨書される。



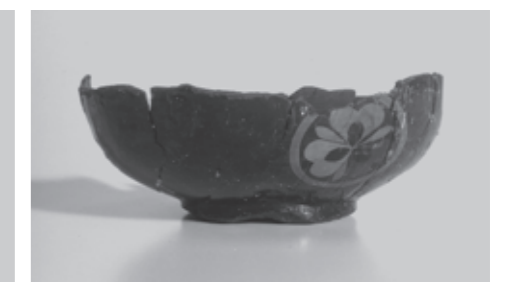
曲物蓋 丁子の絵柄2個と○に「山」字を墨書。



蒔絵櫛 松樹意匠を描く。



漆器独楽 円形の胴の上面に赤漆が残る。



漆器椀 赤漆の椀には黒漆、黒漆の椀には赤漆や金で文様を施す。